

農の架け橋 地域と共に

— 白子町農業委員会だより NO. 15 —



平成31年1月
編集・発行／
白子町農業委員会

農業委員及び農地利用最適化推進委員を皆さんに紹介します。

農業の魅力を次の世代へ伝えていきたい…

白子町北高根 酒井一雄さん（農業委員）

酒井さんのハウスの中に入ると、一面に広がる緑の中に黄色い花が輝いていて、同時に瑞々しい緑と力強い土の懐かしい香りがした。北高根に住み、現在、妻の初江さん、長男の健史さんとともに、ハウス栽培920坪、水稲150aの規模で営農している。

「父親は小学校の教師をしていたが、祖父母と母親が家業である農業をしている姿を見ていて、自分も農業をやるのが使命だと感じた。」と、高校卒業と同時に就農。20歳の時に、春トマト・秋キュウリの温室栽培に挑戦し、以来、一貫して温室栽培に取り組んでいる。

農業委員としての抱負は？と問うと、「自分を育ててくれた地域の役に立ちたい。また、継続性のある農業を考えていきたい。」と地域農業への思いを語る。



後継者である健史さんも就農して6年目を迎え、町の『トマト栽培技術向上研修会』に参加し、単収増加を目指して日々努力している。「息子と一緒にハウスの中で、意見の対立もあり、“生意気なこと言うな。”と思うが、反面、“頼もしくなってきたな。”とも感じている。そして、何よりも親子で農業議論ができることが嬉しい。」と父親としての本音も語ってくれました。



【力強い大地の恵みを吸収したキュウリ】

○新たな農業の形・・・東日本大震災からの復興

白子町農業委員会は、11月、宮城県亶理郡山元町の「やまもとファームみらい野」を視察してきました。

宮城県山元町は、東日本大震災で水田と畑2390haのうち1345haが被害を受け、隣の亶理町とともに東北最大のイチゴの産地だったイチゴ農家をはじめほとんどが被災した。町では平成24年度から、大型栽培施設を集約した生産拠点を整備するとともにほ場整備事業により区画整理に着手。「(株)やまもとファームみらい野」は営農再開と将来の担い手を育てていこうと、みやぎ亶理農業協同組合が中心となって、平成27年7月に設立された。

現在、大区画化されたほ場において、露地野菜や施設野菜の栽培を行い、その全量をJAに出荷している。営農に当たり、出荷調製貯蔵施設は町が整備したものを借上げ、農業機械等は国庫補助事業で導入するなど、地域一体となって震災からの復興を歩んでいる。

【露地野菜】

ねぎ、たまねぎ及びさつまいも等を栽培しており、畑1枚の区画が最大で9haとなっている。区画が大きすぎることから定植では途中で苗の補給のための作業道が必要となる。また、周囲は耕作道となっているが、水捌けが悪く、場所によっては粘土土のため、トラクターが沈むこともあり、周囲に額縁暗渠を設置して対応している。

また、ほ場の周囲は何もなく、風により畑の表層土が飛ばされることが悩みとなっている。

今後、補完工事でガレキの除去を実施する予定である。



【施設野菜】

トマトの養液栽培を行っており、品種は「桃太郎ホープ」、平成29年2月、フッ素フィルムを活用した採光性の高いオランダ型ハウスを総工費4億3000万円で設置。生産面積は65a、年1作・5月から3月の収穫で、栽培1年目から単収50tを達成し、新聞で大きく報道されたところである。全農の指導により、データに基づく栽培と作業の管理を徹底し、葉の長さや花の位置などを週1回観測し生育に合わせた作業を実践。また、栽培株数を通常は10a約2380本だが、約3490本と密植栽培である。



視察講師を務めていただいた、(株)やまもとファームみらい野 島田孝雄社長から、「地域にとって雇用の場は重要であり、今後もその受け皿になり続けたい。また、被災地では交付金により様々な事業が行われているが、行政主導ではなく、計画段階から地元関係者との話し合いを密にして事業を進めていくことが成功に繋がる。」とご教示いただいた。

「生まれ育った土地を津波で荒廃させるわけにはいかない。新しい農業の形を作って新たな生活の基盤として何としてでも復興させるという強い思いがある。」視察前、新聞記事に掲載されていた亶理農協組合長の言葉を読んだが、実際に現地へ赴き、自分の眼で見て、耳で聞いて、「震災からの復興への熱い思い。」を強く感じた視察であった。

農地に係る相談は、それぞれの地域の農業委員・推進委員、または、農業委員会事務局までお問い合わせください。

白子町農業委員会事務局 0475(33)2115